

## 杉野昭博「「障害」概念の脱構築—「障害」学会への期待」との対話

三村洋明

障害学会の発刊した、『障害学研究1』（明石書店）に杉野さんの上記の表題の文章が掲載されています。

まず、障害をめぐる言葉の定義から始めようとしています。障害学会も障害学研究会もイギリス障害学と世界的な「障害者運動」のインパクトを受けて障害の社会モデルの立場から出発したものとわたしは理解しています。ところが、きちんとした障害概念のとらえ返しもないままに出発してしまったのではないのでしょうか？ 今回は、イギリス障害学の本の翻訳者でもある杉野さんの、障害の規定からきちんとはじめようということでの上記の表題の文への期待がありました。

最初に‘障害’を‘障碍’という言葉に置き換えるのは反対である旨主張されています。杉野さんはいろいろ指摘されていますが、その核心のようなことでの反対の理由が、どうもわたしの反対の理由と180度違うようです。障害概念には社会モデル的な意味と医療モデル的な意味が並存していて、リハビリということを否定できない、医療を否定できないという意味において、医療モデルと社会モデルを並存すべきであり、医療モデルを排除した障害概念は承服できないという杉野さんの主張だろうと思います。

これは結局、国連のWHOの障害規定の中で、ICIDHが医療モデルに引きづられているとして、社会モデルへの転換をはかろうとして議論をされていたのに、結局社会モデルと医療モデルの並存におちつきICFとして出された内容を後追いするものでしかありません。そもそもなぜ被障害者(「障害者」)が医療モデルから社会モデルへの転換を提起したのかの意味をとらえ損なっていると思えないのです。

それは社会モデルへの転換を提起したイギリス障害がいまひとつ煮詰め切れていない問題にも繋がっています。そのことは二つあります。そのうちのひとつはイギリス障害学の提起が「障害とは社会が障害者と規定する人たちに作った障壁である」という規定で、言葉をみるかぎりにおいて、障壁—排除型の差別しか問題にしていまません。抑圧型の差別をとらえ損なっています(煮詰め切れなかったことのもうひとつは、最後に述べます)。

すでに、ろう者が「手話をろう学校で禁止し口話主義を押し付けたのは同化という差別である」と抑圧型の差別を取り上げています(抑圧型の差別というのは抑圧、融和、同化とわたしは下位区分しています)。

そしてリハビリテーションの論理の批判も被障害者の立場からさまざまになされてきています。その端的な表現は、「なぜ私たちは「健常者」に近づかなければならないのか、そういう考えは私たちの存在を否定するものである」ということではないかと思います。ただ、きちんと整理した提起がなされてこなかったもので、そのあたりを杉野さんは無視されたのでしょうか？ それとも届いていないのでしょうか？

さて、社会モデルへのパラダイム転換を自らの作業の軸にしているわたしの立場から提起を試みようと思います。

リハビリということが医療的な意味でのリハビリということから始まったのだと思いますが、そこにはあるのは、ホメオタシス(「恒常性」とか訳されています)の原理、ひと生命を維持し、ある状態を維持しようということ、そこで恒常的な状態から乖離したときの、ひとが自然治癒的に復帰していく手助け、そのような意味でのより楽に生きられる手助け、というのが医療だと思いますし、そこでのリハビリがあります。これはとりあえず、否定されるようなことではないといえます。ですが、「障害」(医療モデル)に対するリハビリというのは、「本来のあるべき姿」を想定し、それが「標準的人間像」としてもあらわれるのですが、それに近づくという意味合いでなされます。それで、「本来のあるべき姿」を想定すること自体が差別だという主張ができます。

いわば「標準的人間像を描きそこから外れるとして「障害者」として規定すること自体が差別である」という規定です。

ここで、杉野さん文に沿って、もう少し具体的に対話を試みます。

杉野さんのリハビリテーションの論理における「障害概念」というところで指摘されている、体が意志のさまたげになるというのは、「欠損としての障害」というところからきているとしかわたしにはとらえられません。これは、「中途障害者」の「障害」や「病気」概念での「障害」でしかありません。「先天的障害」では「外」から持ち込まれない限り生まれません。そこから、そもそも、その「標準的人間像」や障害概念自体が構築されたものというとらえ方がされます。そもそも、もう一步踏み込んで、「中途障害者」の「障害」や「病

気」概念での「障害」自体も一時的にはホメオタシスが崩れたというところでの、葛藤に陥ったとしても、そこから新しいホメオタシスが形成されるのではないのでしょうか？ 確かに、社会的な「「障害」の否定性」から、否定的な思いにとらわれていくのが常としても、それを否定的にとらえないというような語りは常に出てきています。そのような意味で、「中途障害者」の「障害」や「病気」概念での「障害」自体も「標準的人間像」として構築されたものにとらえられないのでしょうか？

もうひとつ指摘したいのは、杉野さんは「標準的人間像」と「理想的人間像」を取り違えているのではないかと、わたしはとらえ返しています。

自分がどういふようになりたいとか、ひとつのことができるようになりたいというのは差別ではありません。そういう意味で理想を持つのは否定されることではありません。障害差別が起きるのは「標準的人間像」が描かれるところからきているのであって、「理想的人間像」を描くことからくるわけではありません。「理想的人間像」が優生思想と結びつく場合は別ですが、・・・

例を出してみます。同じ「できるようにになりたい」「できるように頑張る」といっても、たとえば100mを10秒台で走りたい、さらには9秒台で走りたいということと、被障害者が歩けるようになりたいとか、非被障害者と同じようなスピードで歩きたい、もしくは少しでも近づくようになりたいということは同列ではありません。「100mを10秒台で走りたい」というのは、「理想像」ですが、「標準像」ではありません。障害差別の根拠になるのは、「標準」ということです。ICFが障害概念のパラダイム転換に失敗したのは、その文の中で、盛んに「標準」という言葉を使っていることに端的に表れています。その「標準像」がどこからきているのかとらえ返す必要があります。

誤解のないように書いておきますが、わたしはリハビリテーションということの中身の「～～できるようになること」を全否定しているわけではありません。ですが、これまでに被障害者サイドから繰り返し提起されているように、リハビリテーションということには「ねばならない」という抑圧の論理が孕まれているのです。

ここで、「標準的人間像が描かれるのは自然的なことであり、なぜそれが差別なのか」という批判が出てきます。「人の本来の姿があり、そこから外れるものを異化してみるというのは自然だ」という意識です。ですが、事実（事実という言葉には語弊があるのですが・・・）「ある確率と別の確率でいろいろ

差異を持って生まれることがある」という問題です。「差異をもって」といいましたが、そもそもその「差異」自体が問題になるときと問題にならないとき、「差異」として浮かび上がらないときもあるわけです。

このあたりのことは、「できる—できない」ということの社会的なとらえ返しということの今一步のとらえ返しが出来ていないことからきているとわたしには思えます。たとえば杉野さんは「障害学は、そもそも個人がなぜできないのかという、「できないこと」自体の社会的原因の解明に向かう。」と書いています。それは、わたしサイドからすると、なぜその「できないこと」が問題になるのかというもう一步突っ込んだ観点が必要なのだと思います。杉野さんも、「配慮の平等」ということを持ち出して、「できないこと」の相対化を図ろうとしています。しかし、そもそも「配慮」という言葉自体が「障害者が障害をもっている」というところからきています。そもそも障害規定をめぐる議論の中で、「障害者が障害をもっている」こと自体を批判しようとしてきたことをとらえ返しているとは思えないのです。〈差異〉(「差異」として浮かび上がる以前の〈そのもの〉としか言いようのないこと)が、なぜ「差異」として浮かび上がるのかということ自体を問題にする必要があるのではないのでしょうか？

そのあたりはフェミニズムの「ジェンダートラブル」と対比できます。

国際障害分類 ICIDH が障害を **impairment disability handicap** という概念でとらえ返したように、フェミニズムは、**sex gender sexuality** という概念で性差別をとらえ返そうとしていました。しかし、**gender**-ジェンダー(性役割分離)ということを持ち出したことが、**sex**-性差そのものは歴然としてあるということとらえ返しを許すトラブルの元になったということです。ちょうど杉野さんの「「できないこと」自体の社会的原因の解明に向かう。」ということが、「できないこと」自体が問題として浮かび上がること自体の解明をネグレクトしてしまっていることと類比できるのではないかと思うのです。

このあたりがイギリス障害学が煮詰め切れなかったことのもうひとつのこと。結局 **impairment** を括弧にくくってしまった、ということで、そこからもう一度このこと自体をとらえ返す作業をしなければなりません(**impairment** の脱構築とか物象化批判として表せることですが)。

この課題はわたしが今書き始めている「反障害原論」テーマです。これを書き上げる中で対話を深化させたいと思っています。